

中華民国期(1912-1949)における1930年代とは、軍閥の反乱、そして満州事変(1931)から日中戦争開戦(1937)に至る日本の侵略などさまざまな内憂外患を抱えながらも、経済・文化が繁栄した時代である。共産党は長征により革命根拠地を江西省瑞金地区から陝西省延安地区へと移転させ、この時期の国民党独裁体制下での延命を図るいっぽう、大都市では文化運動により影響力を維持し続け、やがて日中戦争と国共内戦を経て人民共和国を建国している。本論文は民国期1930年代の中心都市であった上海を舞台に、共産党主導で展開された中国左翼作家連盟(左連)消長の歴史を上海文壇史の視点から描き出したものである。

第一章「筆会・民族主義文芸運動と左連—結成前後の時期を中心に」は、1930年3月に結成され36年初めに至るまで活動を続けた左翼的作家組織である左連が、結成当初は職能的な作家連合としての性格を有していた点などを分析した。第二章「神州国光社と左連—「自由人論争」を中心に」は、従来の文学史的常識とは異なり、左連は結成から32年末まで、文壇他派と激しい主導権争いを闘わねばならなかった点などを考察した。第三章「党の左連と作家の左連—「第三種人論争」を中心に」は、33年以後の左連が共産党の代替組織と化したため、作家連合としての活動は組織外部へと押し出され、その結果左連の外に魯迅グループが形成された点などを立証した。

人民共和国期の中国内外における左連研究は、70年代までは中共史観の影響下で主に左連中心の30年代文学史として記述され、自由化が進んだ80年代以後は回想録など大量の資料が出現したものの、左翼文学研究自体の低迷化に伴い、新たな研究の展開は乏しかった。本論文は左連内側の資料を実証的に精査し体系化したうえで、左連外側を囲む文学空間としての文壇との関係をも重視することにより、左連運動史の分析において以下のような新しい成果を挙げた。

(1) 1927年以來の上海著作人公会、中国著作者協会による作家連合の流れを継承して、左連が結成されたという人的・組織的關係を明らかにした。

(2) 神州国光社と左連との対立は、従来は理論的対立と考えられていたが、真相は作家連合同士の文壇ジャーナリズムにおける主導権争いという性格が強いことを明らかにした。

(3) 自由人論争、第三種人論争が(1)(2)の流れを汲む論争であり、それが左連を組織的分裂に導いたという文壇史を明確に描き出し、魯迅と左連中心幹部の間で行われた有名な「国防文学論争」の原因分析に新見解を提出した。

そのいっぽうで本論文には、世界プロレタリア文学運動とコミンテルン国際共産主義運動史の観点および現代中国文学史における30年代文学の位置づけという文学史的視点が不十分である。

しかし上記のごとく明快な左連史を描き出すという顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。